けるに、その夜の夢に、辨才天、十二因緣心の惠空、とつけさせ給ひける、やんごとなき事なり、○中略

邑上帝かくれさせ給ひて後、枇杷大納言延光卿あさゆふ戀しく思ひ奉て、御かたみのいろを一生ぬぎ給はざりけり、ある夜の夢に、御製をたまひける、

月輪日本雖相別、温意清凉昔至誠、兜率最高歸內院、如今於彼語卿名、

〔江談抄四〕機緣更盡今歸去　七十三年在世間

此詩大江齊光卒去之後、良源僧正夢所見也、

昔契蓬萊宮裏月　今遊極樂界中風

此詩義孝少將卒去之後、賀緣阿闍梨夢見、少將有歡樂之氣色、阿闍梨云、君ハ何心地喜之、久天波被坐、母君被戀慕、仁波土云者、少將詠曰、

後拾時雨天波、千々乃木乃葉曾、散末加宇、爲加那留里乃、袂奴良左牟、

〔榮花物語二十七衣珠〕まことかの左兵衛督の北の方、○藤原公信妻正月三年○萬壽　廿よ日の程になくなり給にければ、おとこぎみは少將實康の君、まだわらはにて、さては十四ばかりの姫君のいとうつくしきぞ、もたまへりける、よろづあはれ〳〵と思つゝ、兵衛督あつかひ給ひけり、御いみのほど、いと哀にて、すぐし給ふに、このひめ君の御ゆめに、この君をかきなでゝ、よみ給とみえたり、

おもひきや夢のなかなるゆめにてもかくよそ〳〵にならんものとは

〔夢想記〕慶長のはじめの年仲の冬、大坂の亭にうつりおはしましゝころ、○豐臣秀吉　奇瑞の靈夢を感ぜらるゝ事あり、其和歌にいはく、

世をしれとひきぞあはする初春の松のみどりも住よしの神

〔隨意錄三〕戊辰歲○文化五年三月十日夜、夢登麹街候火櫓、春望、四面花柳綿邈、春色不可言、乃得候火樓頭萬里春一句、而夢乃覺、